

彩文土器に描かれた文様 —エジプト先王朝期の「表現」について—

関廣 尚世

Representations on 'Decorated Pottery' Vessels :
A Study of Depiction in Predynastic Egypt

Naoyo SEKIHIRO

キーワード：表現能力、先王朝期、彩文土器¹⁾、器種、施文部位

Key-words: representations, Predynastic period, decorated pottery, vessel forms, decoration areas

はじめに

「エジプト的」と一括して評される大様式は、王朝期が始まる紀元前3050年頃突然出現し、その後3000年という長期にわたって存続したと理解されている。換言すれば、神殿や墓を飾る壁画やヒエログリフを代表例とする独特な「表現」²⁾が、長期間にわたって維持されつづけた文化と行うことができる。

ところが、先王朝期と王朝期の「表現」の間には、一見、断絶のようにも見える大きな変化がある。このために、ともすれば両時代の表現方法は緻密と稚拙という二項対立的に捉えがちである。

しかし、高宮いづみが先王朝期に対して「今日、統一王朝という初期国家はナイル河下流域に居住していた人々の社会の中から時間をかけて現れたと考えられ、国家形成に向けての胎動は、必然的に文献記録のない先史時代に求めることになった」という評価を行っているように（高宮1998：125）、この「表現」についても王朝の成立に伴い、極端に変化したと筆者は考えていない。

そこで本稿では、先王朝期から王朝期のエジプトに生きた人々の「表現」について、それらがどのように展開していったか検討を進めていくにあたり、ナカダII期を指標する数多くの遺物の中で、彩文土器をとりあげる³⁾。そして、器表に描かれた文様について、これまでの研究史をまとめる。これは、彩文土器の「表現」に内包された意味について考えることが、彩文土器のナカダII期における存在意義を定義づけることもさることながら、先王朝期から王朝期にかけての「表現」変化の過程を傍証するものであると予想されるからである。

彩文土器の概要

彩文土器は、ナカダII期からIII期(3650～3050B.C.)において、下エジプトから北ヌビア⁴⁾にかけて広く分布した土

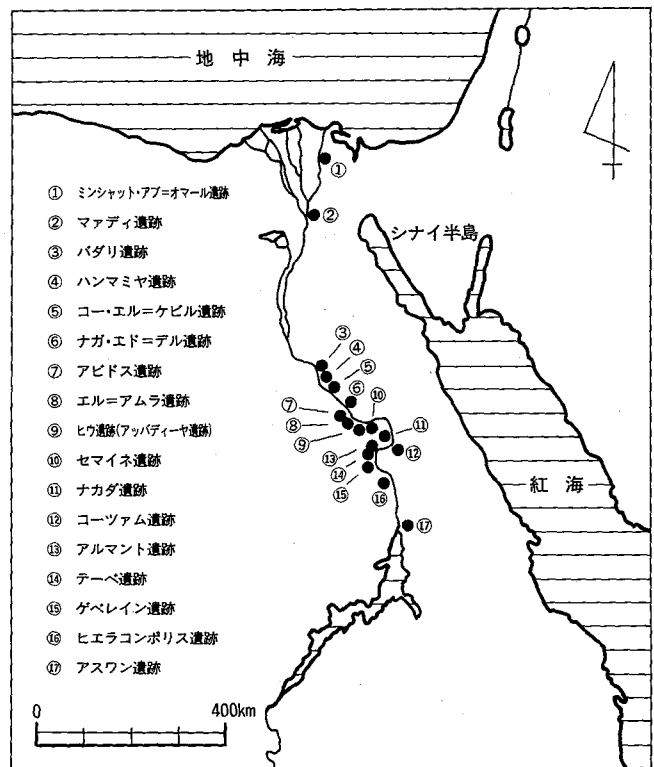


図1 彩文土器出土遺跡

器である(図1)。主な分布範囲は、上エジプトと呼ばれるエジプト南部であり、ナカダ遺跡での出土量が最も多い⁵⁾。しかし、窯跡を含め、彩文土器の製作地についての詳細は不明である。

さて、ナカダII期を特徴づける土器の一部である Decorated Pottery (彩文土器) という分類名はピートリーがつけたもので⁶⁾、倒卵形土器・扁球形土器・二連倒卵形土器・壺形土器・波状把手付土器⁷⁾・異形土器⁸⁾の6形式から構成されている(表1)。また、二連倒卵形土器と異形土器を除いた最大径と器高の関係は図2のとおりである。このうち、

表1 器種分類と部位別文様
(異形土器は器形が多様であるために除外。
Payne 1993より。縮尺不同。)

器形	文様 (口縁・把手・底部)
倒卵形土器	口縁：波状文・斜格子文 把手：波状文・斜格子文・渦巻文・綾杉文 底部：波状文・斜格子文・渦巻文
扁球形土器	口縁：波状文・斜格子文・鱗状文 把手：波状文・斜格子文・渦巻文・綾杉文・鱗状文
二連倒卵形土器	口縁：波状文・斜格子文 把手：波状文・斜格子文・渦巻文・綾杉文 底部：波状文・斜格子文・渦巻文
壺形土器	口縁：文様なし 把手：胴部文様の延長または不明瞭な波状文 底部：文様なし
波状把手付土器	口縁：文様なし 把手：文様なしまたは胴部文様の延長 底部：文様なしまたは胴部文様の延長

倒卵形土器と扁球形土器はある程度のまとまりを示すが、これに対して壺形土器と波状把手付土器はその量に差があり、なかには大型の製品を含んでいる。

これらの土器は、ナイル川周辺の石灰岩台地から流されてきた泥灰土(マールクレイ A1) を用いて作られている⁹⁾。胎土は密で、小型品でもかなりの重量があり、焼き上がりはやや青みがかった淡褐色を呈するのが特徴である。

さらに成形には、回転台を使用していると考えられる。この回転台は垂直方向に主軸をもたず、そのためにロクロのような高速回転が得られないものであろう¹⁰⁾。そして、別作りした口頸部や把手を貼り付けた後、周囲を軽く撫でており、概して端正な仕上がりとなっている。

これから検討する様々な文様は、顔料である赤色オーカーを用いて施されたものである (Arnold and Bourriau 1993: 100-101; Lucas 1934: 182-185; Ritchie 1936)。土器に描かれた文様は、一般的な筆の他、複数の筆先をもつ特殊な筆で描かれ¹¹⁾、それは焼成前に行われている。どちらの筆を用いるかは、描く文様の種類によると考えられる。

彩文土器の文様

1. 部位と文様

まずは、口縁部・把手・底部に施される文様と器形の関係について考えてみたい。胴部の文様は多岐にわたり、彩文土器の意味を探求する際の中心的存在ともなり得るので、後述する。

表1のとおり倒卵形土器は、端部が平坦な口縁と半円筒状の把手が付き、胴部の張りが緩やかな卵形を呈するものである。底部は扁平な形状をとる。この器形には口縁部と把手や胴部はもちろんのこと、底部にまで文様が施されている。

扁球形土器にも、端部が平坦な口縁と半円筒状の把手が付くが、胴部は強く張り、扁平気味な形状を呈する。底部は丸みを帯びた形状をとるのが特徴である。口縁部と把手には倒卵形土器と同様に文様が施される。しかし、底部を意識した文様を施す場合とそうでない場合があり、これは後者の傾向が強い。

二連倒卵形土器にも端部が平坦な口縁と円柱状の把手が付き、胴部は倒卵形土器2個体が接着した形態をとる。倒卵形土器と同様に、口縁部・把手・底部をそれぞれ意識して彩文が施されている。

壺形土器は、口縁端部が丸みを帯び、三角形の把手を持つものと、持たないものがある。胴部の張りは強く、底部は扁平で、比較的大型品が多いのが特徴である。把手の有無にかかわらず、いずれも口縁部や底部には文様が施されていない。また、把手には胴部に描かれる文様が広がっている個体があり、必ずしも施文部位として意識しない傾向

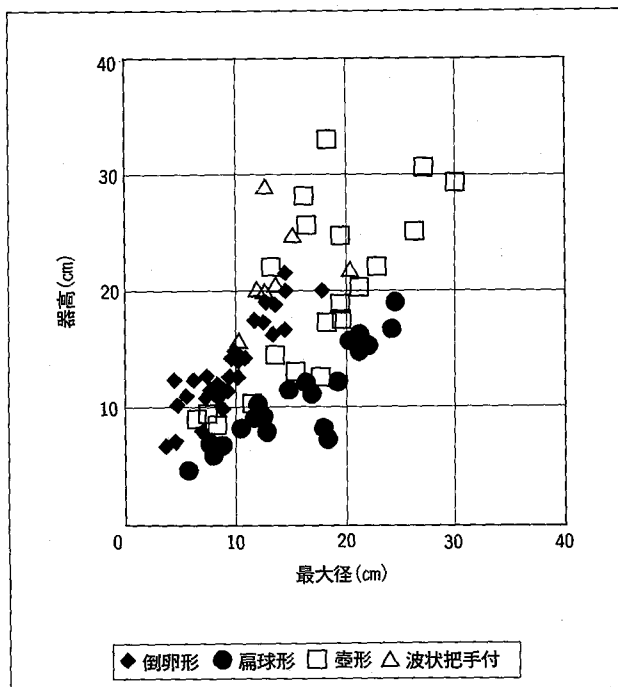


図2 各器種の最大径と器高の相関関係

にある。

波状把手付土器も壺形土器と同様にその形状から、口縁部を意識して文様が施されていない。把手についても、波状のものよりも半円筒状の把手を意識して文様が施されていると言えよう。また、底部も胴部からの文様が広がっているのが一般的である。

したがって彩文土器は、器形によって文様が施される部位が異なっていることが認められる。また、場合によっては部位を優先的に意識して文様を描いているとすらいえるだろう。

一方で、描かれる文様の種類については部位ごとに特に大差はない。しかし、扁球形土器の口縁部と把手に用いられる鱗状文は、管見の限り他の器形では見られない点で、鱗状文と扁球形土器との間に何らかの相関関係がある可能性が高いといえるだろう。また、器形に関わらず、渦巻状文は把手や底部に用いられるのに対し、口縁部には用いられないようであり、綾杉文が把手に用いられるのに対し、口縁部や底部には用いられないようである。このことから渦巻状文は把手や底部、綾杉文は把手といった文様と部位の相関関係を考えることができるだろう。

2. 文様研究史

さて、ここまで口縁部・把手・底部に施された文様についてその概要を述べてきたが、文様研究の中心は、学史的にみてもやはり胴部に描かれたものであった。これまでの研究については年代ごとに明確に分離できるわけではないが、表2に掲げたプロセスを経たと考えることができる。

第1段階では、まず個別文様の同定作業が最優先されていたということが出来るだろう。この結果、19世紀末以来、文様間の関係よりも個々の文様が何を模していたのかをめぐって、様々な議論が繰り広げられることになった。

大半は民族例の応用や常識的判断と言う範疇で研究は進められたが、具体的には表3のとおりである。有花植物文はアロエ (Schweinfurh 1897)¹²⁾、あるいはエンセテ種のバナナであると推測され (Larsen 1957 : 244)、とくに先端に花のようなものを付ける茎の形状が議論の対象となった (Täckholm 1951 : 306-308)。無花植物文はシカモアだと考えられた。船形文はそもそも船ではなく城塞であるとする立場と (Naville 1916-17 : 77-78)、船であるとする立場

にわかれた (Petrie 1896 : 12, 48-49, 1914 : 33-34 ; Edgerton 1922-23 : 109-124 ; Thomas 1923 : 97)。鳥形文は、先王朝期の墳墓にその卵を副葬することからダチョウと考えられた一方で (Petrie 1896 : 12)、嘴の形状からフラミングであるとも考えられた (Haulihan 1986 : 35 ; Newberry 1913 : 135 ; Payne 1993 : 101)。波状文の場合は、ともに描かれる文様の解釈が反映され、波や砂のうねり (Naville 1916 : 78)、そして単独で用いられるとアラバスター容器の石目を模した文様だとして (Petrie 1896 : 40)、極端に解釈が変化した。S・Z字状文についても、飛ぶ鳥 (Petrie 1920 : 20 ; Payne 1993 : 101)・草 (Read 1917 : 149) など一つの文様に極端な解釈の差が生まれた例である。そして、渦巻状文・鱗状文極・斑状文・水玉状文に関しては、石材中に散在する鉱物が示す流理の模倣であるという解釈がなされた (Payne 1993 : 101 ; Petrie 1896 : 12)。しかし、この作業だけでは文様の全貌が見えず、次の段階にその答えを求めることになる。

第2段階では、第1段階で行われた個別文様の解釈をもとに、一方で解消できなかった文様の時代的・文化的位置づけを行うため、同時代の資料との比較が主流となった。この作業ではヒエラコンポリス遺跡100号墓で検出された壁画や土製人物像、上エジプトのワディの岩肌に描かれた絵 (以下、岩絵) などがその対象となった¹³⁾。

第1段階において城塞の可能性が考えられた船形文も、ヒエラコンポリス遺跡100号墓壁画や岩絵にある船形文と類似することから、船形文の議論は船説に落ち着いた。そして、乗船しているかのようにみえる人物状の文様についても、男性像の風貌や手に握る杖まで同様な比較研究が行われた。杖の形状については王朝期に用いられたヒエログリフにも同じ形があり、先王朝時代から王朝時代への時間的連続性を説く根拠の一つとなった。女性像についても超自然的な意味をもつと考えられていた土製女性像とポーズが類似することから、土器に描かれた女性像にも同様の意味合いがあると考えられた (Needler 1984 : 206)。

このように第1・2段階では、個別文様の解釈とその文化的な文脈の位置づけに終始していたが、それらをかき集めても全体的な解釈はつながらずままであった。

こうした中、第3段階に至ると、これまでのように文様

表2 文様研究史の流れ

第1段階	個別文様の同定作業さえ進めば、自ずと文様全体の意味も明らかになる。
↓	
第2段階	同時代資料との比較。描写方法の類似点から、個別文様の同定作業を進める。
↓	
第3段階	個々の文様をある程度のグループで認識。 第2段階的手法を用いながら、土器1個体内の構成に目を向け始める。

ごとに行われていた解釈から、文様をある程度のグループにわけて検討し、その中に物語を求めようという動きに変化した。この段階での関心事は、遠近法や王朝時代に用いられたレジスターなどの表現手法との関係である。彩文土器に描かれた文様はいくつかにわかれ、それらは現在の遠近法ならば一枚の絵に収めてしまえるものを、これを完全に習得できないがゆえに、不完全な形で風景を描くようになった結果だというのである¹⁴⁾。

しかし、文様をグループごとに解釈し始めたことで、第1・2段階的な研究が行われていないというわけではない。現在でも個別の文様に言及する際には、第1段階で行われた方法が尊重されている (Needler 1984 : 202-211 ; Payne 1993 : 98-101)。

このような研究を踏まえ、彩文土器に描かれる文様は、一般的に、「上エジプトにおけるナイル川の風景を描写したもの」、または「埋葬に関わる儀式を表現したもの」¹⁵⁾ という解釈が与えられている。また、土器自体を指して、宗教的・象徴的な奢侈品であるという位置づけをするに至っている。

研究の問題点

文様研究史の概略は、このように3つの段階にわけることができる。それをまとめると、第1段階は個々の文様の解釈さえ可能となれば、彩文全体の意味も明らかになるだろうという展望のもとに進められた。土器に描かれている文様が何かを同定するために、民族例や19世紀末から20世紀初頭のエジプトやその周辺地域に残っていた習慣を参考としたものである¹⁶⁾。そして第2段階では、第1段階の結果を踏まえ、同時代の資料や初期王朝期の資料との比較を行うことで、文様の起源や様式、さらに文化的文脈を捉えようとするものであった。

表3に掲げた個別文様の研究史は、第1段階や第2段階の文様研究である。有花植物文はエンセテ種のパナナ (Larsen 1957 : 244 ; Täckholm 1951 : 306-308)、無花植物文はシカモア (Adams 1988 : 48)、船形文は多数のオールと船室をもつ船 (Petrie 1896 : 12, 48-49, 1914 : 33-34 ; Edgerton 1922-23 : 109-124 ; Thomas 1923 : 97)、鳥形文はフラミンゴまたはダチョウ (Haulihan 1986 : 35 ; Newberry 1913 : 135 ; Payne 1993 : 101 ; Petrie 1896 : 12)、有角動物文はヌビアアイベックスや北アラビア産オオカモシカ (Payne, S 1993 : 260-261) といった解釈を可能にしたのである。ところが、第1段階の基本姿勢であった彩文土器の文様の意味を明確にするため、各々の文様を同定する (Edgerton 1922-23 : 110) という目論見は成功しなかった。なぜなら、鳥形文・有角動物文の解釈としていくつかの種を候補にあげたとしても、それを断定することは

不可能である。また、渦巻状文・鱗状文・斑状文・水玉文に至っては、流理であると断定することはできないからである。これらは「似ているから」がその解釈法なのである。つまり、アドホックな解釈でしかなく、第2段階における同時代資料との比較においてもそれはかわらなかった。そして、このような解釈を集合させても、なぜそのような文様を土器に描く必要があったのか、という疑問が生じただけである。

次に第3段階では、第1段階や第2段階のように文様を個別に考えることから、ある程度のグループに分けて考える方法へと発展した。土器に描かれる文様を物語的に捉えようとする試みである。この場合、彩文土器の文様には未熟な遠近法が用いられており、文様のまともは風景を観察者からの距離に応じて切り離れた単位ということになる。しかし、文様の中にある程度のグループを認めても、文様の全体的な意味や価値は明らかにできなかったと言っただろう。

このように、第1段階から第3段階の研究史にみられる問題点を振り返ると、先王朝期に用いられた彩文土器の文様に、体系的な意味など存在しなかったとも考えられるかもしれない。しかし、そう言い切ってしまう前に、いくつかの検討が必要である。

まず第1には、文様研究が有花・無花植物文や船形文といった具象的な文様を中心に進められてきたという点である。抽象的な文様である渦巻状文・鱗状文・斑状文・水玉文は、いずれも流理を模した文様であると解釈されたきり、その後は余り省みられていない。つまり、これらの石目の文様は、具象的な文様ともいえる船形文や植物文とともに描かれた場合も同じ解釈でよいのか¹⁷⁾、また、斑状文は石灰岩や角礫岩を模した文様だとされるのに対し、他の石目を模した文様との間には石の種類に差がないのか、といった追求が余りなされていないのではないだろうか。

第2には、個別文様の解釈上の非整合性が置き去りにされている点だといえる。これは第1の問題点でも指摘したように、特定の文様の解釈が余り深められていないことを反映しているともいえる。非整合性とは、文様の解釈と描き方に不自然さを残しているということである。一例をあげると、波状文 (表3-2) に示したように、船形文は船、波状文は水と解釈した場合、両者の描写関係では、「船の上に水がある」という状況を示していることとなり不自然である。また、船の装備として必要なマストが船から分離されて描かれるなど、矛盾する点をあげると枚挙に遑がない。そしてこのような非整合性が生じた理由を、安易に不完全な遠近法を用いて描いたため、一つのシーンが分断されてしまったことに求めることもできないのである。

第3には、文様と器形や出土地といった文様以外の属性

表3 胴部に描かれる文様1 (Payne 1993より、図の縮尺は不同)

	文 様	特徴と解釈	解釈の根拠	問題点
有花・無花植物文		<p>左の文様が有花植物文でアロエ (Schweinfurh 1897) を模したものの。右の文様は無花植物文でシカモアを模している (Adams 1988)。</p>	<p>自生地域(アフリカ東部~南部)が近い。日当たりが良く排水の良い土壤に適する。生命力が強いという点で象徴的意味がある。</p>	<p>アロエの花は「直立した茎」の先についているが、この植物文の先は曲がっている①。</p>
		<p>左の文様はエンセテ種に属するバナナ。花の形状①や基底が一つになっているという茎の形状が、彩文土器に描かれる文様と似ている (Tackholm 1951)。</p>	<p>自生地域はエチオピアで、上エジプトと地理的には近い (Larsen 1957)。気温10°C以上で、腐食質に富む排水の良い土壤に生育する。</p>	<p>有力説</p>
船形文		<p>大きく湾曲した船体に無数に付くオール①、船室②、ヤシ科植物の枝③、船ごとに異なるスタンダード④、舵・ロープ⑤。オールの間隔から概算すると船の全長は約30mにも及ぶ (Petrie 1896, 1914; Edgerton 1922-23; Thomas 1923)。</p>	<p>ヒエラコンポリス100号墓壁画やナイル川東岸流域の岩肌に描かれた絵に用いられている船と類似する (Kantor 1944)。</p>	<p>先王朝期に全長30mの規模の船はありえない。オール①が短すぎ、水面に届いたときには船体が浸水するおそれがあること。有力説</p>
		<p>無数の短い線で柵を表現した①城塞。真中に位置する間隔⑥は、城塞入口へ続く道である (Edgerton 1922-23; Naville 1916)。</p>	<p>船と解釈した場合に不都合なオールの形状を柵と考えることで合理的な解釈ができる。</p>	<p>壁画などには城塞を描いた例が他にない。</p>
マスト・小マスト状文		<p>マスト (Petrie 1896)。または動物の皮をはった戦士の持つ盾 (Bowen 1960)。</p>	<p>形状がいわゆるマストに類似している。</p>	<p>マスト状文は着脱可能な装備として考えられているが (Payne 1993)、実際にこのマストを掲げる船は認められない。</p>
鳥形文		<p>バダリ期より上エジプトや下ヌビアに生息するダチョウ (<i>Struthio camelus</i>)。</p>	<p>ダチョウの卵が先王朝期の墓から出土し (Petrie 1896)、王朝時代の壁画装飾にもダチョウはよく登場すること (Haulihan 1986)。</p>	<p>嘴の形状が彩文土器に描かれている鳥形文と異なる。</p>
		<p>嘴が中央で折れ曲がり、下嘴は部厚く、上嘴は下嘴に対して蓋状をなすオオフラミンゴ/<i>Phoenicopterus ruber</i> (Haulihan 1986, Newberry 1913, Payne 1993)。</p>	<p>嘴の形状が類似する。また、一般的には下エジプトにも生息し、船形文の上に立てられたスタンダードとも関連する可能性 (Newberry 1913)。</p>	<p>フラミンゴはデルタ地帯に生息するが、ナカダ文化は上エジプトが中心 (Needler 1984)。</p>
有角動物文		<p>長く反り返った角をもつ動物。ヌビアアイベックス/<i>Capra ibex</i>・アフリカ産オオカモシカ/<i>Oryx dammah</i>・三日月形の角をもつ家畜山羊/<i>Capra dom</i> (Payne, S 1993)。</p>	<p>角の形状が類似する。</p>	<p>具体的にどの種か同定できない。</p>
		<p>ねじれた角をもつ動物。北アラビア産オオカモシカ/<i>Addax nasomaculatus</i>・シカレイヨウ/<i>Alcelaphus buselaphus</i>・ガゼル/<i>Gazella</i>・ねじれた角をもつ山羊 (Payne, S 1993)。</p>	<p>角の形状が類似する。</p>	<p>具体的にどの種か同定できない。</p>
人状文		<p>男性像。着衣や顔などのディテールは表現されない。手にもつ杖には2種類あり、武器をもつ場合もある。</p>	<p>ヒエラコンポリス遺跡100号墓壁画と類似 (Kantor 1944)。杖はヒエログリフでも2種類存在する。</p>	
		<p>女性像もしくは女神像。あるいは踊り子 (Needler 1984) 手を頭まで高く上げるポーズをとる。男性像よりも大きめに描かれる (Payne 1993)。</p>	<p>土製女性像のポーズと類似 (Petrie 1896)。王朝期にみられるカーや魂の保護を意味するヒエログリフとの類似 (Finkensstaedt 1988)。</p>	

表3 胴部に描かれる文様2 (Payne 1993より、図の縮尺は不同)

	文 様	特徴と解釈	解釈の根拠	問題点
波状文		水の波立つ様子、または風の通った後に出来る砂のうねり (Neville 1916)。間隙を埋める装飾 (Read 1917)。短い波状文が数条集まった場合は、アラバスター容器にみられる石目を模倣している (Petrie 1896)。	水も砂もアラバスターの石目も、その形状が類似しているため。	船形文の上に描かれることから、水と考えにくい。底部に描かれる場合もあり*1、波や砂のうねりと考えた場合は不自然。
S・Z字状文		波状文から分離した水。ヒエログリフ「n」の祖型あるいは茂みや草 (Read 1917)。フラミンゴの飛行 (Petrie 1920 ; Payne 1993)。	S・Z字状文を羅列すると水を意味するヒエログリフの「n」を意味する文字と類似している。	茂みや草は、捏造装飾*2を観察したことによるもので根拠がない。
山形文		胴部を一周するように三角形が連なった文様。この山々は動物の休息地 (Petrie 1896)。	ナイル川流域の台地とは異質な山岳地形である場所。	鳥形文や有角動物文の描かれない土器にも用いられる。
渦巻状文		角礫岩の模倣 (Needler 1984)。石目の模倣 (Payne 1993)。鳥の腸 (Logan 1990)。大型渦巻文と小型渦巻文がそれぞれ単独、または混合して描かれる場合がある。	石製容器と同じ器形の土器に文様が施されている。個体によっては鳥形文が渦巻状文の近くに描かれている。	具象文の描かれる土器の底部にも描かれる*3。1点の土器を分析しただけで鳥の腸としている。
鱗状文		石目の模倣 (Payne 1993)。口縁部を含めた、器表すべてに描かれる。	石製容器と同じ器形の土器に文様が施されている。	
斑状文		特に、石灰岩・角礫岩の石目を模倣している (Petrie 1896)。器面すべてに泥がはね散ったような形状を呈する。	石製容器と同じ器形の土器に文様が施されている。	波状把手付土器にも施される。
水玉文		筆で一つ一つ丁寧に顔料を付けている。器面全体に文様が施される。	石製容器と同じ器形の土器に文様が施されている。	波状把手付土器にも施される。

表註

- * 1 底部に波状文が描かれる場合は、胴部に船形文や植物文が描かれているため、この場合にどの解釈を当てはめるかが問題となる。一方で、部位ごとの文様の意味違いを追及していないことの証ともいえる。
- * 2 土器は先王朝期または王朝期のものを用いているが、明らかに後世の人間が彩文を加えている土器 (Brunton 1934 ; Fibkenstaedt 1988 : 90-92 ; Payne 1977) が存在する。
- * 3 1と同様に、胴部に用いられた場合には流理と考えられるのに対し、船形文や植物文のような具象的な文様が胴部に用いられた場合には、底部に描かれた渦巻状文は網代と考えられている (Payne 1993 : 101)。しかし、胴部に渦巻状文や波状文といった抽象的な文様が用いられ、底部に渦巻状文が描かれた場合にはどう考えるのか、といった問題がある。

との関係が軽視されていることも問題点の一つであろう。ところで彩文土器には、異形土器を除くと、倒卵形土器・扁球形土器・二連倒卵形土器・壺形土器・波状把手付土器の5形式があることを表1で示した。また、このうち倒卵形土器・扁球形土器・二連倒卵形土器は口縁部と把手、そして倒卵形土器と二連倒卵形土器に関しては底部をも意識して文様が描かれていることを述べた。このことから、描き手が、器種や部位を明らかに意識し、それにあわせて文様を選んでいることを暗示しているといってもよいのではないだろうか。しかし、これらの器種と文様の関係、部位と文様の関係については、これまで余り論じられていないのが現状である。

つまり、これまで進められた1世紀あまりの文様研究においては、ナカダII期には船形文を中心とした彩文を施す土器が存在するという様式観¹⁷⁾をもちながら、これらの出土地域や器種と文様との関係といった検討が行われていないことが指摘されよう。

彩文土器の可能性

このように、これまでの文様研究史をまとめ、その問題点を抽出すると、彩文土器が単に宗教的・象徴的な奢侈品であるという結論だけに留まらせるわけにはいかないといえるだろう。また、文様の解釈においても、個々の文様を同定すれば全体の文様の意味がわかるとしながら、文様構成から理解できるはずの全体像はおろか、それから導き出せる意味についてもいまだに曖昧さを残しているといえよう。渦巻状文・鱗状文・斑状文・水玉文といった抽象的な文様と別の抽象文が組み合わさる場合には、流理の模倣とされるのに対し、具象的な文様と組み合わさる場合には、抽象文が組み合わさった場合と同じ解釈にはならない。

一つの文様が同じ組上りのせられていないことも、このような曖昧さを生み出した原因の一つといえるのではないだろうか。

ナカダII期の彩文土器は、決められた文様が部位や器形をある程度共有しながら用いられているという文様の反復性、先に述べた異形土器を除く5形式の土器と文様との関係、そして口縁部や把手・底部といった部位と文様との関係から、文様を任意に装飾として描いたと言い切ることを拒んでいる。仮に、それが任意の装飾ではなく象徴的な文様であったとしても、そのような不可解な文様がすぐさま儀礼や儀式的表現として、何の手続きも行わずに直結することを拒んでいるといえるだろう。

問題の所在は、文様や彩文土器がどのように、あるいはどの程度「象徴的」であり、それゆえに「奢侈品」となりうるのかという検証の手續きが踏まれていないところにあるのである。文様の繰り返しや、器種と部位による文様の

相違は、その描き手、さらには彩文土器を必要とした人間が、文様を描く段階でさまざまな選択を行っていることの証である。

つまり、先王朝期のエジプト人がどの文様にこだわり、そしてそれを土器のどの部位に描いたのかという点が重要なのである。また、彩文土器とその文様は、目前の事象を先王朝期のエジプト人がどのように捉え、整理できたかという認識・認知能力とも深く関係する遺物であるといえるだろう。

したがってこれらの文様は、思いのほか高度に記号化された意味のある一群と言える可能性を持つことから、単に宗教的・象徴的な奢侈品であると片付けることは難しいように思えるのである。

まとめ

本稿は、エジプト先王朝時代の表現能力が王朝期へ向け漸次的な発展を遂げたことを考える前段として、文様研究上の問題点について、学史を中心に簡単にまとめてみた。その結果、文様を描こうとする器種や部位、どの文様を別のどの文様と組み合わせるのかという選択が重ねられて、彩文土器が完成するというプロセスを想定することができた。また、選択を重ねた後に完成する彩文の意味は、目前の事象を彼らがどのように認識・認知し、整理したのかを反映していることが予想されることから、高度に抽象化(記号化)された文様の一群である可能性が強まったといえるだろう。こうした状況から、王朝時代の複雑な表現形態を開花させる素地は、既にナカダII期には存在していたことを暗示していると考えられる。

彩文土器の文様研究は、各々の文様が何を描いたものかを追求した第1段階、さらに墓壁・土製人物像・岩絵といった同時代資料との比較から彩文の意味を捉えようとした第2段階を経て、土器に描かれる文様を個別で捉えず、ある程度のグループで捉えようとする第3段階まで進んでいることを述べてきた。しかし、今後は器形と文様の関係や各部位と文様の関係、地域ごとの文様差との相関関係を検討する第4段階的な研究が必要となるだろう。

「彩文土器の可能性」の項で述べたように、問題の所在は文様や彩文土器が、どのように、あるいはどの程度「象徴的」であり、それゆえに「奢侈品」となりうるのかという検証の手續きが踏まれていないところにある。また、彩文土器とその文様は、目前の事象を先王朝期のエジプト人がどのように捉え、整理してきたかという認識・認知能力とも深く関係する遺物であるとも述べた。

これまでのように彩文土器は、単なる宗教的・象徴的な奢侈品とだけ解釈するのではなく、先王朝期のエジプト人の事象に対する認識・認知能力と深く関係し、かつその表現

能力を表す可能性があると捉えるべきではないだろうか。

そして、器形と文様の関係や各部位と文様の関係、地域ごとの文様差との相関関係、さらには出土状況と文様との関係といった詳細な比較検討が、彩文土器の性格をより先王朝期のエジプト人の認識に基づいた、現実的なかたちで復元するための近道であると考えられる。

今後はさらに資料を集め、これらの具体的な検討を行っていきたい。

註

- 1) 「彩文土器の概要」でも述べるように、ここでいう彩文土器 Decorated Pottery という名称は W.M.F.ピートリー (Petrie) の分類に順ずる。また、この彩文土器の器形や文様に外来要素があるとされているが、本稿では先王朝期のエジプトの中で用いられているという点を重視する。このため、交易史や交流史の中での彩文土器の位置づけに関しては、稿を改めたい。
- 2) ここでいう「表現」とは、コミュニケーションに必要な言語も含めた意思伝達手段を指し、特に本稿では、現在まで物質として残存している意思伝達手段の痕跡を対象とする。彩文土器の彩文の意味を考えることは、意思伝達と言う一般的な行為を考えるためのプロセスである。
- 3) 先史時代人の精神生活を取り扱う場合は、より検証可能な立場から行うのが肝要である (Renfrew 1994 : 15-21)。こうした立場から、象徴的意味合いをもち、人間の精神生活を反映する6つの切り口があるされている。すなわち、デザイン・プランニング・度量衡・社会との関連・超自然的なものとの関係・表現である (Renfrew 1994 : 6)。
- 4) 北ヌビアのアクシャ遺跡とダッカ遺跡でも彩文土器の出土を確認しているが (Wildung 1997 : 43, 45)、これらの遺跡はアスワンハイダムの建設で、ナセル湖の湖底に沈んだ遺跡である。
- 5) 本稿では、バダリ遺跡・アビドス遺跡・エル＝アムラ遺跡・ヒウ遺跡・アッパディーヤ遺跡・セマイネ遺跡・ナカグ遺跡・コーツァム遺跡・アーマント遺跡・テーベ遺跡・ヒエラコンポリス遺跡・アスワン遺跡から出土し、アシュモレアン博物館に所蔵されている資料を中心に利用した (Payne 1993)。彩文土器の総出土量から比べると少数であるが、彩文土器の器形や文様研究史を概観するにあたりさほど問題ないと考えた。
- 6) 先王朝期の土器は、Black topped pottery・Polished red pottery・Cross-lined pottery・Black incised pottery・Rough-faced pottery・Decorated pottery・Wavy-handled pottery・Late pottery・Fancy forms of pottery の9形式に分類されるが (Petrie 1901 : 13-17)、彩文土器はこのうちの一つである。
- 7) それぞれ、倒卵形 (ovoid)・扁球形 (squat)・二連倒卵形 (double ovoid)・壺形 (jar)・波状把手付 (wavy handled) である (Payne 1993)。
倒卵形については、卵が逆さになった形状に近いことから、この訳語をあてることにした。また、ピートリーの分類で波状把手付土器は別形式となっているが、彩文が施されるものに限って、彩文土器を構成する一器種となっている。
- 8) 異形土器とは、先に述べたなどの器形にも分類できないものである。動植物を象形するものと、他の5形式とは明らかに異種で変則的な器形をとるものがあり、その存在は散発的である。
- 9) マールクレイ A 1 という分類は、1980年にウィーンで採掘された「ウィーンシステム」という土器分類基準によるものである。ア

ラプ以前の土器をナイル沖積土 (ナイルシルト) 製・泥灰土 (マールクレイ) 製に区別し、さらにそれらを混和材や鉱物の有無・割合によって細かく分類したものである。マールクレイはA群からE群に分けられ、とくにA群は1類から4類、C群は1類と2類に細別されている。顕微鏡観察に基づくこれらの分類は、サンプルの出土地に偏りがあることや、第6王朝から第18王朝までのデータが多いことなど、普遍的な基準として用いるには問題点も多い (Nordström and Bourriau 1993 : 176)。しかし、本稿では便宜的に用いることにした。

- 10) エジプトにおけるロクロ使用は、第5王朝以後と考えられている (Arnold and Bourriau 1993 : 42)。しかし、土器内面に見られる平行するナデ調整の痕跡や、水平に一周するケズリ調整の痕跡を認めることができるものも存在する。ナカグII期の彩文土器には、少なくとも回転台の使用は認めなくてはならない。
- 11) 一つの柄に対し、複数の筆先を持つ道具である。イランや北シリアにもこのような道具を用いる技法が存在し、同様にエジプトの彩文土器にも用いられた可能性があるとされている (Braidwood 1939)。
- 12) Schweinfurth, G. 1897 Über den Ursprung der Ägypter. *Verhandlungen der Berliner Anthropologischen Gesellschaft*. は未入手文献であるが、有花植物文がアロエであるという説がこの文献によるものであることをペイン (Payne 1993 : 100) とタックホルム (Täckholm 1951 : 300) が明記している。
- 13) 船形文が、彩文土器ではオールが強調されているのに対し、ヒエラコンポリス100号墓ではオールが描かれない。さらに、ヒエラコンポリス100号墓壁画において船尾が船首よりも高く外国船と考えられている船が、彩文土器には描かれないといった比較である。人状文では、動物の皮を纏った姿で墓壁に描かれる男性の服装が、彩文土器よりも細かい描写が行われているとの評価をもたらしている。
また、ナカグI期から存在する土製人物像と、彩文土器の船形文の上に描かれる女性像は、上げた手を頭につけあたまも踊っているようなポーズをとっていることから、関連性が考えられている。ワディの岩肌に刻まれる岩絵についても似たような解釈が行われている。

これらの文様は、相互に影響しあいながらも、土器・墓壁・岩肌といったそれぞれ異なる素材、大きさに描かれることから、細部において描写方法が変わってきたのだと考えられている (Kantor 1944 : 114-117 ; Petrie 1896 ; Rice 1990 : 34)。

本稿では、これらの別素材に描かれる類似文様の存在を否定するものではない。しかし、描かれる素材が異なるということも、絵の意味に差異を生む可能性があるかと筆者は考えている。

- 14) 実存する風景を描き手にとって都合よく分割するために、実際にひかれるわけではない想像上の基底線 (base-line) を用いたという。下段に描かれるものが観察者から最も近いところにあり、上段に描かれるものは最も遠いところにあることを意味する。また、デイビスはこのような王朝期にもみられる描写方法から、先王朝期の美術と王朝期の美術が思いのほか近い関係にあるという (Davis 1975)。

しかし、彩文土器に描かれる文様と基底線が具体的にどのような関係にあるのか、そして総体的にどのような構成を有しているのかについては、具体的な説明がなく不明なままである。

- 15) ペインズ (Bains) は、ナカグII期からIII期の政治的統合が進行するなかで、威信財の役割を果たすものが大きく発展し、かつそれらが急激に消滅したとする。このような動きをしたものの中の一つに彩文土器があるとし、この土器に描かれる文様はエリート

- 層の参加した儀式を描いたものとしている (Bains 1989 : 476-477)。
- 16) 20世紀初頭のカメルーン川の河口では、船首に旗竿のようなものを立て、その先端は羽を束にして飾るといった原始的な帆のようなものを使用している船があったという (Thomas 1923 : 97)。
- 17) 底部に渦巻状文が描かれた場合には、石材の中に含まれる鉱物が示す流理ではなく、網代を模したものであると考えられている。表3-2の波状文や渦巻状文の項とも関連する。
- 18) ここでいう「様式」とは、彩文土器を構成する6形式の集合体のみを指すのではなく、ナカダII期を指標するすべての物質とその組み合わせを意味する。

参考文献

- Adams, B. 1988 *Predynastic Egypt*. Aylesbury, Shire Publications LTD.
- Arnold, Do. and J. D. Bourriau 1993 *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Bains, J. 1989 Communication and display: The Integration of Early Egyptian Art and Writing. *Antiquity* 63: 471-482.
- Baumgartel, E. J. 1976 The Predynastic Civilizations. *The Cambridge Ancient History*, Vol. 1, Part 1. Chap IV, 463-494.
- Bowen, R. L. 1960 Egypt's Earliest Sailing Ships. *Antiquity* 34: 117-131.
- Braidwood, R. J. 1939 A Note on a Multiple-brush Device Used by Near Eastern Potters of the Fourth millenium B.C. *Man* 39: 192-194.
- Brunton, G. 1934 Modern Painting on Predynastic Pots. *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* 34: 149-156.
- Davis, W. 1975 The Origins of Register Composition in Predynastic Egyptian Art. *Journal of the American Oriental Society* 96: 404-418.
- Edgerton, W. F. 1922-23 Ancient Egyptian Ships and Shipping. *The American Journal of Semetic Languages and Literatures* 39: 109-135.
- Finkenstaedt, E. 1988 Predynastic Egyptian Pottery. *Bulletin of the Cleveland Museum of Art* 75: 75-94.
- Hassan, F. A. 1988 The Predynastic Egypt. *Journal of World Prehistory* 2: 135-185.
- Houlihan, P. F. 1986 *The Birds of Ancient Egypt*. Warminster, Aris & Philips.
- Hornblower, G. D. 1928 A Spiral Design in Prehistoric Egypt. *Ancient Egypt*: 68-69.
- Hornell, J. 1945 The Palm Leaves on Boats Prows of Gerzean Age. *Man* 45: 25-27.
- Kantor, H. 1944 The Final Phase of Predynastic Culture. *Journal of Near Eastern Studies* 3: 110-136.
- Larsen, H. 1957 On a Detail of the Naqada Plant. *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* 54: 239-244.
- Logan, T. J. 1990 The Origins of the Jmy-wt Fetish. *Journal of American Research Center in Egypt* 27: 61-69.
- Lucas, A. 1934 *Ancient Egyptian Materials & Industries*. London, Edward Arnold.
- Naville, H. E. 1916-17 Les dessins des vases préhistoriques égyptiens I. *Archives Suisses d'Anthropologie Générale* 2: 77-82.
- Needler, W. 1984 *Predynastic and Archaic Egypt in the Brooklyn Museum*, pp. 202-211. Wilbour Monographs 9. Brooklyn, The Brooklyn Museum.
- Newberry, P. E. 1913 Some Cults of Predynastic Egypt. *Annales of Archaeology and Anthoropology* 5: 132-136.
- Nordström, H. A. and J. D. Bourriau 1993 Ceramic Technology: Clays and Fabrics. In Arnold, Do. and J. D. Bourriau 1993, pp. 149-190.
- Payne, J. C., A. Kaczmarczyk and S. J. Fleming 1977 Forged Decoration on Predynastic Pots. *Journal of Egyptian Archaeology* 63: 5-12.
- Payne, J. C. 1993 *Catalogue of the Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Payne, S. 1993 Comments on the Identification of Animals. In J. C. Payne 1993, pp. 260-261
- Petrie, W. M. F. and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, B. Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1901 *Diospolis Parva*. London, B. Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1914 Paintings of Prehistoric Towns. *Ancient Egypt*: 33-34.
- Petrie, W. M. F. 1920 *Predynastic Egypt*. London, B. Quaritch.
- Read, F. W. 1917 Boat Fortified Villages ? *Bulletin de l'Institut français d'Archeologie Orientale* 13: 145-151.
- Renfrew, C. and E. B. W. Zubrow (eds.) 1994 *The Ancient Mind : Elements of Cognitive Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Rice, M. 1990 *Egypt's Making : The Origins of Ancient Egypt, 5000 -2000B.C.* London and New York, Routledge.
- Ritchie, P. D. 1936 Notes an Examination of Some Prehistoric Pottery Pigments. *Technical Studies* 4: 234-236.
- 高宮いづみ 1998 「ナカダ文化論—ナイル河下流域における初期国家の形成—」『岩波講座 世界歴史2 オリент世界』125-144頁
- Täckholm, V.L. 1951 The Plant of Naqada. *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* 51: 299-312.
- Thomas, E.S. 1923 The Branch on Predynastic Ships. *Ancient Egypt*: 97.
- Vinson, S. 1994 *Egyptian Boats and Ships*. Buchinghamshire, Shire Publications.
- Wildung, D. ed. 1997 *Sudan : Ancient Kingdoms of the Nile translated by P.D. Mannelian and K. Guilanme*. Paris, Institut du monde arabe.

関廣尚世
 広島大学大学院生
 Naoyo SEKIHIRO
 Hiroshima University